様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：８０１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６８４５

研究課題名（和文）アイヌ英雄叙事詩における伝承の流動性に関する研究

研究課題名（英文）A study on drifting of oral tradition Ainu heroic epic

研究代表者
遠藤　志保（ENDO, Shiho）

北海道博物館・アイヌ民族文化研究センター・研究職員

研究者番号：９０７６１６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：アイヌ英雄叙事詩のテキスト、特に「虎杖丸の曲（kutune sirka）」という沙流川流域にて採録・筆録された5種類の異伝テキストについて、物語内容（プロット）の構成ならびに表現の異同についての研究を実施した。特に表現の違いにかんしては、それぞれの語り手（筆録者）の語りにおける表現の仕方の特徴などといった「語り手論」につながるデータ・考察を得られた。

研究成果の概要（英文）：In this research, I analyzed the expression and the structure of narrative in Ainu heroic epic, especially “Kutune sirka” handed down in Saru district. There are five variations of this text. And I analyzed what kind of the differences between each five texts.

研究分野：アイヌ文学

キーワード：アイヌ文学　口承文芸　伝承

１．研究開始当初の背景

アイヌ文学、特にアイヌ韻文文学における語法が日常表現のそれとは異なることは、アイヌ語学においても金田一京助以来、指摘されてきたことである。アイヌ文学の立場からの研究としても、たとえば、口承文学におけるフォーミュラ理論に基づいた論文として、中川裕、2001「口承文芸のメカニズム－アイヌの神謡を素材に－」（藤井貞和（他編）『シリーズ言語態第２巻　創発的言語態』東京大学出版会）などがある。

一方で、プロットあるいは登場人物の置換といったテキスト内容における流動性についての研究については、まだ少ないのが現状であり、研究代表者が「アイヌ英雄叙事詩「ニタイパカイェ」の２種類のテキストに関する考察」(『千葉大学　人文社会科学研究　第 27 号』千葉大学人文社会科学研究科、2013）や、「アイヌ英雄叙事詩における結末－同一ストーリーにおける揺れを中心に－」(『口承文芸研究　第 37 号』日本口承文芸学会、2014）において論じているほかは、神謡というジャンルについて、中川裕、1993「動物神の自叙－ アイヌの神謡 － 」(『古代文学講座』第 2 巻、勉誠社)で自叙者の置換について論じているにとどまる。

以上のように、本研究において目指した異伝同士の比較についてのアイヌ文学における研究の蓄積は少ないのが現状であるため、本研究において、アイヌ文学におけるヴァリアント研究の基礎的研究を行うことが必要となると考えたものである。

２．研究の目的

本研究においては、異伝の間にみられる内容あるいは表現についての違いや揺れが、どのような点において、どの程度確認できるのか、あるいは逆に揺れが見られないのは、どのような点なのかといった点に着目して分析を行い、アイヌ文学における伝承の流動性にかんする知見を構築することを目的とした。

内容面については、プロット構成、登場人物や地名などの固有名詞や呼称の異同、あるいは主人公をはじめとする登場人物のキャラクター性の異同といった面に着目して、比較を行う。

表現にかんしては、主に常套句（フォーミュラ）について、字句の異同、常套表現が使われる場面や頻度の異同に着目しての分析となるが、そのほかにも接続句などのように常套表現よりも汎用性の高い表現についても、比較を行う。

それぞれのテキストの生成にあたっては、物語を聞き覚えた人物ならびにその人物のテキストの影響が大いにあるものと予想される。そのため、誰から物語を聞いたのかといった伝承関係の詳細について、伝承者に関する書誌情報を中心とした調査も含めて行うことによって、伝承経路とテキストとの相関関係についての分析も行う。

中心として行うのはアイヌ英雄叙事詩「虎杖丸の曲（kutune sirka)」の異伝比較である。現時点で確認できる異伝の数が未公刊資料も含めて５種と、かなりの数があることと、伝承者の関係がある程度明らかになっているうえ、地元に伝承者に関する資料も少なからず残っていると考えられることが選定の主な理由である。しかし、異伝が確認できるアイヌ英雄叙事詩は「虎杖丸の曲（kutune sirka)」のみではない。同じ沙流川筋で複数の異伝が確認できるテキストとしては「ニタイパカイェ」があり、こういった英雄叙事詩についても、「虎杖丸の曲（kutune sirka)」の分析にあたって得られた知見がどの程度通じるものなのかといった面に着目しながら、分析を行う。

３．研究の方法

（１）　アイヌ英雄叙事詩テキストについて、調査を行い、翻刻・和訳ならびにテキスト打ち込み作業を行う。

（２）　各テキストの伝承関係について、伝承者についての書誌情報の収集を中心に調査を行う。

（３）　各テキストについて、プロットの構成や表現の異同について比較を行うことによって、アイヌ文学における伝承の流動性について分析する。

４．研究成果

平成 27 年度は、比較分析に用いるための口承文学テキストならびにデータを集めることを目的として、分析対象としている未公刊テキスト「虎杖丸の曲（kutune sirka)」の画像取り込みならびに翻刻作業、すなわちデジタルカメラ等による画像データ作成とパソコンでの打ち込み作業を行い、口承文学テキストのデジタルデータ化を行った。また、伝承者のひとりについて調査を行い、書誌情報を若干追加することができた。

平成 28 年度には、平成 27 年度の成果として得られたテキストデータを用いて、「虎杖丸の曲（kutune sirka)」という沙流川流域にて採録・筆録された 5 種類の異伝テキストについてを中心とした比較分析を行った。

具体的には、「虎杖丸の曲」の 5 種類のテキストを並べることによって、物語の内容（プロットならびにモチーフ)、登場人物ならびにその呼称、固有名詞の名称などのような物語内容やその構成に関わる点についてと、描写の回数や挿入される位置、くり返しや省略の有無や頻度、対句のような常套的な表現などといった、表現に関わる点についての両面から、各テキストにおける一致点と相違点を、それぞれ一覧表にまとめる作業ならびに考察を行った。

いくつかのトピックについて、その成果をあげると、次のようになる。

(1)プロットの構成について

５種のテキストにおいて、プロットを構成する主要な要素のすべてが完全に一致しているテキストというものはない。ただし、そのなかでも特に金成マツのテキストが、他の４者とは異なる点が最も多いテキストとなっている。その理由の最たるものとしては、伝承者の生活地ならびに伝承経路がひとりだけ異なっていることが考えられる。

(2)登場人物の呼称について

物語中に登場する人物のなかには、同じ役割・振る舞いをするにも関わらず、別のテキストでは別の呼称となっている人物というものが見られる。そして、各テキスト間で名称の揺れが大きい登場人物と、名称が一致する傾向が高い登場人物とがある。たとえば「赤禿（hure mawpo)」と呼ばれる「女泥棒」は Nispokunukur であるテキストと Ciwaspetunkur であるテキストとがあり、この「女泥棒」は名称の揺れが大きい登場人物のひとりである。一方で、ラッコをめぐる戦いにおける敵対者はいずれのテキストにおいても Iskar「石狩」（Iskarunkur / Iskarunmat）で一致している。

いずれのテキストにも共通している、おおよその傾向としては、前半に出てくる敵対者はその呼称に揺れが少なく、後半になって初めて登場する敵対者は名称の揺れが大きいということがある。

これは、「虎杖丸の曲」自体が、大きく前半・後半に分けられることや、物語の成立過程において、いくつかの場面の挿入したことなどが関係していると考えられる。そのため、以上のような登場人物やプロットの相違を分析することによって、このテキストの構成や成立について考える上での知見にもつながると考えられる。

(3)描写が挿入される場面について

山城やその周辺の風景の様子などが描写される場面を見ると、多くのテキストに共通して見られるのが「最初に登場した際に１度」描写の仕方である。これは、英雄叙事詩における描写の語り方の定石となっていると考えられる。

しかし、すべてのテキストがこうした基本的な語り方に則しているのではない。平賀エテノアのテキストにおいては、ほかの４種よりも山城の描写が挿入される回数が多いという傾向が見られる。平賀エテノアによるテキストは、他の４種の異伝と比較して、長大なテキストとなっているがその要因のひとつとして、このような描写の挿入回数の違いがあると言える。

換言すれば、描写が挿入される場所や回数は、伝承者個々人の語り口によって左右される場合があるということである。ただし、平賀エテノア以外のテキストにも「最初に登場した際に１度描写する」という語り方が共通して見られるように、英雄叙事詩におけるすべてが表現の挿入・組み立ての仕方が伝承者の語り口に還元されるわけではなく、アイヌ英雄叙事詩における、基本的な描写の方法というものがあり、それは伝承過程において忠実に継承されていることがわかる。

(4)くり返しと省略について

口承文芸においては、同じ動作や場面、モチーフが２度３度とくり返されることがしばしば見られる。その際に、そのくり返しは省略されずに前回と同じような表現でもってくり返されることが既に口承文芸研究において指摘されている。アイヌ口承文芸においても、同様である。

鍋沢ワカルパのテキストなどでは、前に１度行われた動作が短い表現でまとめられるということが見られる。一方、平賀エテノアのテキストにおいては、そういったくり返しの省略はほとんど見られず、一連の流れが、毎回同じように再現されている。このように、簡単な表現に置き換えることも可能な場合であっても、それをせずに、１度めと同じ動作をフルセットで語るという特徴が平賀エテノアのテキストには見られる。そして、このようなくり返しや、それがどの程度省略されているかという点について、各テキストを並べてみると、同じ場面であっても、くり返し回数の違いの他、発言の有無、動作をどれほど丁寧に語っているのかなど、テキストごとにそのあり方は決して一様ではなく、それぞれに独自のパターンや特色がある。

以上のくり返しを含む、表現の違いにかんしては、対象テキストにおける一回性のものである可能性も考えられる。アイヌ口承文芸の伝承者は、みずからが語るテキストの長さを自由に変えられるという言説も少なくなく、時間がないなどで端折って語らなければならないときには、その時間にあわせて語るという報告もある。そのため、対象テキストにおいて見てきたような諸特徴は、この採録テキストにおける一回性の特徴であり、それぞれの伝承者／筆録者が「虎杖丸の曲」を違う場で口演した際には、このような特徴が必ずしも見られないという可能性も考えられる。

しかしながら、久保寺逸彦が『アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究』（岩波書店、1977）において、平賀エテノアが語る神謡の特徴についてまとめた文章においては、「ざっとした感想」と注記しつつも、「やや冗長で、筋の運びがやや緩慢」であるというように述べている。これは、平賀エテノアのテキストにおいて、くり返しが多く使われており、さらにはくり返しが多いのみならず、前に出てきた内容・表現をほぼ同じようにくり返すという傾向も顕著であるという特徴と合致すると考えられる。

そのため、本研究において考察の対象とした特徴については、このテキストのみに見られる一回性の特徴であるというよりも、それぞれの語り手による別のテキストにおいても見られる表現の特徴にもつながることが考えられる。

したがって、本研究においての目的としていた伝承過程における流動性の問題のみならず、「語り手論」につながるデータ・考察を得られたと言うことができる。これは、今後のアイヌ口承文芸研究において、明確に語られることのなかった分野についての研究の可能性を考えることができたという点で意味深いものであると考える。

なお、以上にあげた研究の成果については、平成 29 年度中にまとめて発表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤志保　(ENDO, Shiho)
北海道博物館・アイヌ民族文化研究センター・研究職員

研究者番号：９０７６１６３５

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)